

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：君に届け

あらすじ

黒髪ロングで陰気な雰囲気から「貞子」と呼ばれ、クラスで孤立している黒沼爽子。そんな彼女に、クラスの人気者・風早翔太が話しかけてきます。風早の明るさと優しさに触れ、爽子は少しずつ心を開き始めていく。

風早との出会いをきっかけに、爽子はクラスメイトとも打ち解けていき、友情を育んでいく。同時に、風早への特別な感情に気づき、初めての恋の喜びと苦しみを経験する。物語は、爽子が自分自身と向き合い、成長していく姿を描き、見た目とは裏腹に、純粋で思いやりのある爽子の心の変化や、周囲の人々との関係性の変化が丁寧に描かれている。そのなかで初恋の喜びと苦しみ、友情の大切さ、そして自己肯定感など、普遍的なテーマを繊細に描き出し、思春期から青年期の心の揺れ動きを瑞々しく描いた作品である。

今回のテーマ

恋愛について考える

恋愛に関して、「恋に落ちる (fall in love)」という言葉がある様に、突然ある異性の人が気になり、思い焦がれ、身動き取れない状態に陥ることであり、自分ではコントロールできない事象の様にあまたの小説やドラマで描かれている。そしてそういう感情になることが、歓喜に満ちたもので、素晴らしいことの様子に描かれている作品が多数である。そして事実、人を好きになることで、日々の生活が彩りを持ち、活気のある生活場合もある。

しかし一方で吉本ばなな は「うたかた」という小説のなかで次の様に書いている。

「人を好きになることはほんとうに悲しい。一恋、たとえるならそれは海の底だ」

この言葉は、主人公が報われることのない恋に陥り、苦悩する中で出てきた言葉だ。これも真実である。恋愛とはそもそもどの様なものなのだろうか？

また面白いことに「恋に落ちる」という様に自分ではどうしようもできない情緒の様だが、一方で、「恋をする」言葉がある様に自身が能動的に行為する様にも表現されている。この世に生を受けた全ての人を感じる感情であるが、よく考えると非常に不思議な感情である。

今回、「君に届け」という作品を通して、「恋愛」とは何か？ということを経験的に考えていく。このアニメを見ながら感じたこと、風早くんと主人公の爽子は恋仲になっていく過程を描いているが、風早くんと爽子の関わり合いのなかで爽子の心は成熟し、かつて心の殻に閉じこもっていた爽子は徐々に心を開き、クラスの子たちと打ち解けていく。そして、その風早くんと爽子の関わり合いは、心理療法の過程にも似ていると感じられた。この点をうまく表現できれば、と考えている。そして、そのことによって、この「恋愛」という感情について、少しでも考えるきっかけになればと思う。

I. 恋愛は転移からはじまる

II. 恋愛は人との距離を縮めること

III. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

I. 恋愛は転移からはじまる

1. 転移とは？

精神分析の創始者であるフロイト (Freud,S) がクライアントの治療を通して発見したもので、クライアントの過去に生じた感情や対人関係のパターンが、クライアントとセラピストとの間で現れてくる現象。

この「転移」という現象によって、クライアントの過去の両親（もしくはそれに近い人物）に向けられた感情が想起されたり、その相手との関係性が反復されたりすることが多い。(例えば 母親転移、父親転移)

転移は心理療法の中だけに現れるのではなく、日常生活の中でも、多少なりとも現れることがある。そのような場合は、場所や相手が変わっても同じような人間関係のトラブルやパターンを繰り返してしまうこともある。

2. 陽性転移と陰性転移

クライアントがセラピストに対して、信頼や尊敬、愛情といった感情を向けることを「陽性転移」と言う。例えば、治療開始早期に、セラピストへの陽性転移により表面的に精神症状が改善したかのようになることがある（転移性の軽快）。クライン的に言えば、良い対象に抱えられていると考え、前向きに捉える様になっていく。

逆にクライアントがセラピストにネガティブな感情を向けることを「陰性転移」という。例えば、治療の経過に伴い、クライアントがセラピストに対して「自分のことを大事にしてくれていない」「理解しようとしてくれていない」などといった不信感や怒り、憎しみの感情が湧くときがある。→精神分析や分析的治療ではこの陰性転移を扱うことが非常に重要と考えられている。

3. 出会いは転移から

主人公である黒沼爽子は純粋な性格で、前向きかつ努力家である。また、人の役に立てる事を喜びとしており、周囲と仲良くしようという性格である。一方で小学時代から真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、それからそのあだ名が定着し、周囲から恐れられる。しかし周囲の恐れはある意味、自身の心の投影の様にも感

じられる。

つまり、爽子は周囲に溶け込みたい思いがある一方で周囲と関わることを恐れ、その中で内向的で壁（自己愛的殻）を作り、葛藤している様に感じられる。

そこに周囲と関わるきっかけを作ってくれたのが、風早翔太である。

1) 風早翔太との出会い

風早翔太：爽やか・気さくな人柄で男女を問わず人気者のような存在。爽子曰く「みんな風早くんが集まって行って そこから輪ができていくような私とは正反対の男の子」

その彼と爽子は出会い、彼女の取り巻く世界が変わっていく。

高校の入学式のあの日 いつも なぜかあやまられてばかりの私に 笑って「ありがとう」と言ってくれた あの日から 風早くんは私の憧れです——。

主人公の黒沼爽子は、上記の様に風早くんのことを思っているが、周囲の人々と違い、受け入れてもらったことで憧れの念（陽性感情）を抱いているが、この時点で爽子は風早くんに対して陽性転移が起きていると考えられる。

2) 風早翔太との会話

爽子が友達と「爽やかさ 100% むしろもう爽やかさから出来てます」等、風早くんのことを噂していたときに、偶然風早くん本人に聞かれてしまい、爽子が「ほめ言葉」と言い、それを風早くんが吹き出し、受け止め、爽子をフルネームで呼んだシーン

爽子「私…、…誤解が解けたのって…初めてかもしれない」

風早「…ちゃんと喋ったら、ちゃんと自分の気持ちいったじゃん」

そこで爽子の気持ちが非常に揺れ動き、今まで爽子が感じたことのない色々な感情が動き出す。

いいなあ このひと いいなあ ……初めてだよ

名前を 呼ばれるのも—— …こんな気持ちも生まれて初めてだよ

そして爽子は矢野あやのと吉田千鶴と関わり、自分の思いを伝える。

3) 矢野あやのと吉田千鶴と関わり

あやのと千鶴の二人が肝試しをめぐって爽子の話題をしていたときに爽子はお化け役をやらせて欲しいと伝え、「みんなと仲良くしたくて だけど そのために いやいや やっているわけじゃなくて」という。その言葉にあやのと千鶴は協力する。そこで爽子はわかってもらえた気がして風早くんを感謝する。

わかってもらえた……！！ 私の気持ち

ほんの少しだけど かわれた気がする 風早くんのおかげだよ

→その後、爽子は二人と交友関係を形成していく（交友関係にいたるまでの揺れ動きは後述）。

また、今後、対峙するであろう胡桃沢 梅（くるみちゃん）とも関わるようになる。

→憧れの存在である風早くんに後押しされる中で、爽子は徐々に周囲の人たちとの関わりを持っていく様になっていく。これは風早くんが爽子にとっての良い対象となり、これまで内向的で壁を作ってきた爽子が周囲の世界に関わろうとするきっかけを作り出している。それは風早くんという存在（これは実際の風早くんではなく爽子の心のなかで抱く風早くん像であり、彼女の内的対象）が爽子にとって心の支えになっている。つまり彼女にとって風早くんは良い対象となり外界に触れていくきっかけを作り出している。

しかしその過程での爽子と風早くんの距離は、紆余曲折を繰り返し、一筋縄ではいかない。なぜなら、主体が対象と距離を縮めていくことは、様々な情緒を呼び起こし、怖くなり、引き返したい気持ちに駆られてしまうからである。しかし、やはり距離を縮めたいという気持ちが強く、その葛藤を克明に描き出している。このアニメを見ている人たちは、自身の過去の恋愛経験を思い出し、胸を締め付けられる。

II. 恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。それはある意味、母子関係に近づくことのようにも思える。（カップルがイチャイチャすることもそれに当てはまるのだろう。）しかし、母子関係とは異なり、その関係が成立するかどうかは相手の思惑も関係する。相手が自分をどのように感じているのか、手探りで確かめていく作業が必要であり、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶら

れる。

「君に届け」は、何気ない高校の日常生活を描きながらも、主人公の心の揺れ動きを細やかに、繊細に描写している。それが、若者の心を惹きつける理由の一つと考えられるだろう。

そしてこの作品の主人公の黒沼爽子は風早くんと恋仲になる前に、彼女は小学時代から真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、それからそのあだ名が定着し、周囲から恐れられていたことから確固とした友人関係が築けず、彼女自身も心の壁を作っていたように感じられる。まず、その心の揺れ動きから考えていきたい。

1. 風早くんとの出会い プロローグ

1) 肝だめしでの風早くんとの関わり

肝だめしで風早くんと爽子がふたりきりになった時に爽子が感じた気持ち

急に 喋らなくなるから どうしていいのかわからない

…ところが めちゃくちゃになりそう

まるで生まれかわったみたいに 初めての気持ちばかり

…風早くんは 私に はじめてを たくさん くれるみたい

【考察】

爽子は風早くんと二人きりになる中で、陽性感情（好き、喜び、感謝など）を抱いたと考えられる。しかし、風早くんと出会って初めて感じたこの感情をどのように扱っていいかわからず、またその感情を自分が抱いていることを非常に怖がっていたと考えられる。これ以上親密になると、相手を傷つけてしまう、そして自分自身も傷ついてしまう、と無意識に感じたと思われる。それ故に、このときの爽子は当面、この距離感でいることを望んでいたと思われる。

→しかしその思いは肝だめしの結果発表で脆くも崩れてしまう。

2) 風早くんとの関係を周りから囃し立てられることでの葛藤

風早くんが罰ゲームを受けることになり、肝だめしで貞子（爽子）に迫られていたと周り

から噂され、貞子と1週間つきあえる権を提案される。そのことに怒る風早くん。

風早「それが 罰ゲームなんて失礼すぎる 黒沼 女の子なのに …笑えない」

その言葉に周囲は

「風早、おまえ…… まさか ほんとに貞子の事好きなの…!？」

その言葉に揺り動かされる爽子 「風早くんの名誉が……!!」と感じ咄嗟に発言する

爽子「…誤解です。……たしかに私は、昨日 風早くんと一緒にいました。だけど、それは……何も特別なものではなくて…みんなも知っている通り誰にでも分け隔てなく接してくれる人だからです。……私が…風早くんの優しさや……爽やかさ 明るさ…正直さに……惹かれたのは事実で……それだけは……何の誤解もありません……」

そう言って礼儀正しく、教室を出ていく

この時同時に爽子は以下の様に思っている

……私 誤解の解き方…しってる 風早くんが 教えて くれたから

間違っ て なかったはず

きっと 誤解はとけたはず

嘘はひとつも なかったもの

本当のことを 言ったんだもの

きっと 風早くんの名誉は守れたはず

【考察】

このときの爽子にとって風早くんは「理想化された」良い対象と捉えられていたと考えられる。「1週間つきあえる権」の経緯において、爽子は風早くんの名誉が傷つけられたと考えたが、それは同時に自身の理想化された良い対象が傷ついたことでもある。そして実際には、爽子自身もその言葉に様々な情緒を抱いたと考えられる。そこで風早くんを守る発言をし、自らの身を引くことで事態を収めようとしたと考えられる。

しかしそれは、自己愛的な殻に退避することであり、一度は近づいた風早くんとの関係性を壊してしまうことである。

→その後、爽子は自分が起こした言動は正しかったと言いつけさせるが、風早くんとはもう以前の様な関係には戻れないと感じると、爽子はさみしく感じる。

爽子は今までの傷つかないように距離を取るといふ、これまでとってきた防衛の仕方は、無意味であり、変えたいと感じ始めている。それが以下の思いに込められている。

……だけど…

やっぱりさみしい

夏休みが明けたら もう目も あわないかもしれない

みんなと同じように「おはよう」って

…笑ってくれないかもしれない

さけられるかもしれない

そんなの慣れていたつもりだったのに あんまり嬉しくて慣れなんて忘れちゃった。

風早くんに出会う前の自分なんて もう 忘れちゃった…

そこで風早くんに出くわす

3) 風早くんとの再会

もう以前の関係には戻れないと爽子は感じていたが、学校に行く時に風早くんに出くわす。そしてクラスの子達からの謝罪の気持ちとともにお詫びの品として、風早くんからクッキーが手渡される。それに爽子は感極まって泣く。

爽子「ありがとう……誤解とけたんだね…… かばってくれて わざわざ持って来てくれて 口きいてくれて……ありがとう」

風早「……あのお、多分…黒沼は おれのこと あんま わかってないと思うんだ。」

爽子「……気を遣わないで！ 風早くんの気持ちはちゃんとわかって…」

風早「…わかってないじゃん ……おれ 期待しちゃってもいんだよね？夏休みも黒沼に会えるって」

いつか いつか 君に届くだろうか

【考察】

ここでの二人の会話は、どこかぎこちなく、噛み合っていない印象を受ける。風早くんは爽子との距離を縮めようとしているのに対し、爽子は風早くんの真意を理解しようとせず、

殻に閉じこもったような態度を取っている。風早くんは、誰に対しても優しく接する性格ゆえに、周囲から浮いている人は放っておかない。だからこそ爽子にも優しく接しているのではないかと、爽子は勘違いしている。つまり、爽子は自分自身が風早くんと同等の存在ではないと考え、彼を手の届かない憧れの存在として見ている。

「君に届け」というタイトルには、二つの意味合いが込められているように思える。一つは、爽子の想いが風早くんに届けという意味であり、もう一つは、爽子が憧れの存在である風早くんと対等な関係にまで届けという意味である。

いずれにしても、「君に届け」を実現するためには、爽子が殻を破り、周囲との関係を深め、ひいては風早くんと心の距離をより縮めていくことが必要不可欠である。そして爽子自身も今後、徐々に風早くんを始め様々な人との距離を縮め、交友関係を形成していきたいと感じる様になっている。それは爽子自身が風早くんに自分の存在を受け入れられていると感じているからであろう。

2. 矢野あやのと吉田千鶴との友情

プロローグで爽子は風早くんと距離感で揺れ動きながらも、徐々に関わられる様になり、まだ自分の思いが風早くんに届いていないと感じている。しかし一方で、風早くんが爽子にとって憧れの存在になり、彼女の心の中の良い対象となっている。そんな良い対象に支えられながら爽子は外的世界に触れていき、矢野や吉田と友人になり、そのことをきっかけにクラスの子達とも仲良くなっていく。しかしそこは一筋縄にはいかず、思春期ならではの葛藤や悩みを抱えながら、様々な困難に直面していく。

ここで再び Adolescence Process を取り上げる。

1) Adolescence Process に関して

二次性徴に前後して自分自身の心身に大変動が生じる。

潜伏期に一旦は収まっていたエディプス葛藤が再び起き、自身のこれまでのアイデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶっていく。

潜伏期をひっくり返して、それまで慣れ親しんできた生き方を試される重要な時期。その中で誰もが喪失的感情を抱く（だからこそ第二の分離個体化）。

この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方をする傾向にあると言われている（妄想分裂ポジション）。物事は正しいか間違っているか、素晴らしいかひどいかのどちらかであり、中間にはあまり余地がない。この段階では、若者が自己中心的で、自分自身を中心に考えるのは普通のことであり、この一環として、この年代の人々は、自分の外見について自意識過剰になり、常に仲間から判断されているように感じてしまう。

Adolescence Process の中で爽子の心は揺れ動き、周囲に対して非常に迫害的に捉えながらも一旦親しくなると、その相手（対象）を理想化とも思えるほど「夢のよう」と良い対象と捉えている。その中で爽子の心は混乱し、再び退避をしながらも風早くんに支えられながら人との距離を縮めていく。

2) 席替えにまつわる葛藤

先ほど、この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方に陥りがちであると述べたが、爽子は同年代の人々との距離を置き、自己愛的殻に閉じこもり、心の平静を装おうとしている。それは、無意識のうちに殻の外の周囲を「悪い対象」と捉え、常に迫害不安を抱えていると考えられる。そのため、爽子は自分の悪口に非常に敏感になっている。迫害感を抱いている時に実際に悪口を耳にすると、自己否定感がより強くなり、他者との距離をさらに取ろうとする。

しかし、爽子は風早くんという「良い対象」に支えられていると感じており、それ故に迫害感を抱えながらも徐々に周囲の人たちと関わりを持とうとしていく。

その一端が示された例が席替えをめぐるシーンである。

・その前に数学のクラス替えのときのやりとりから

A「あーそういや この席って 普段 誰なの？」

B「貞子だよ」

A「えっ貞子……座ったらたたられるって聞いたよ！」

そこで爽子が彼女らに勇気を振り絞って言う

爽子「あのう……大丈夫だよ 汚くないし…す、座っても 何も起こらないよ」

「私 そんな力ないよ！ 私…靈感とかもないから……」

爽子は心の中で 言った 言った 言ったよ！と呟き、鼓舞する。
しかし何も反応なく彼女らは、その場を立ち去っている。

【考察】

爽子が常に抱えている迫害感が、実際に聞こえてくるほど強くなっている。そして爽子は言った子たちに対して果敢にも関わっていかうとする。一般的に不登校になってしまう子たちは、このような出来事に非常に傷つき、より周囲に対して迫害的恐怖感を抱き、クラスに入ることができなくなり、不登校に陥ってしまう。以前の爽子であれば、そこまで恐怖を感じることはなくとも、じっと耐えて殻に閉じこもっていただろう。

しかしこのシーンでは、爽子は彼女たちに対して果敢に関わろうとする。それは、風早くんが爽子の心の中の良い対象となったことが大きい。(彼に支えられ、受け止められていると感じているのだろう。)
「言った 言った 言ったよ！」という彼女のつぶやきは、自身の心の風早くんに言っているようである。

そして席替えのとき

爽子は周囲の視線が気になる。周囲は「貞子」の近くの席にならないことを強く感じている様である。そして爽子の耳にその様な言葉が実際に聞こえて来て、爽子は傷ついてしまう。そして爽子は思う。

いつか 「この席になれて嬉しい」って 誰かと 言えたらな……

→そこで風早くんが自ら爽子の隣の席を希望し、そして矢野あやのと吉田千鶴も近くに着く。

そのことに帰り際、一人感激する爽子。そこに風早くんが爽やかに声をかける

そして爽子は思う

……一体 いつからだったのかな……

憧れも尊敬も それは今でもかわらない。一だけど…憧れも 尊敬も飛び越えて
生まれてしまった もっともっと大きな 大すきな気持ちは

→徐々に距離が近づく中で、爽子は風早くんに惹かれていくのを感じる。それは、爽子自身が主体的に他者と関わりたいという萌芽的な段階になっているとも考えられる。

そして、爽子の作った講義ノートが好評であったことから徐々にクラスの人たちからも受け入れられていく。

3) 噂、いき違いからの誤解

風早くんと距離も近くなり、矢野やちづとも交友関係が形成されそうな時に、彼女らの関係性を壊す様な噂話（吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴している）が広がり、そのことに加え、些細ないき違いから、彼女らとの関係がギクシャクしていく。その中で爽子はトイレで噂を聞く。

それは「貞子（爽子）が吉田と矢野をバックにつけて、風早くんをいいように使っている」という、ありもしない噂であり、それで「貞子につきまとわれてたら 株を落とす」という話を聞き、爽子は自分が本当は矢野や吉田とを傷つけており、いつか風早くんも傷つけてしまうのではないかと？自分が周りにいると迷惑になる、離れた方がいいと考え、彼女ならびに風早くんからも再び距離を取ろうとする。

【考察】

元々殻に閉じこもりやすい爽子は、風早くんを始め、矢野や吉田、そしてクラスの人たちからも受け入れられていき、自分の思いが叶いつつある中で、強い喜びを感じていたと思われる。しかし、その距離が続くなかで、爽子は自分が本当に彼らに受け止めてもらっている存在なのか、という疑念を抱き始めたと考えられる。確固とした関係性が築かれていないため、噂話（ある意味、自身が周囲をかき乱しているという内的空想の投影でもある）や些細ないき違いから、対象（風早くんたち）を傷つけてしまったのではないかと罪責感に苛まれたと考えられる。爽子は彼らとの距離感が不安定に感じられ、今の関係性が怖くなり、自身が傷つくことを恐れ、反動で再び距離を取ろうとしている。

そして対象関係論の理論で考えたとき、爽子の心は迫害不安と抑うつ不安が混在しているようにも感じられる。詳細にいうと、自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの状況であった爽子が風早くんに母の様に抱えられる中で（なにかこころが「竜とそばかすの姫」を想起させられる。）、徐々に妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安が変わっていく中（抑うつポジションへの過渡期）で、再び退行（退避）しようとしているとも捉えられる。

cf: PS ポジション 迫害不安→PS ポジション 抑うつ不安→D ポジション

しかし風早くんへの思いも強く、爽子はその自身が抱く思いをあらがいたい思いも強く出ている。

印象的なシーン

風早くんが黒沼の様子がおかしいといい、声かけたときに爽子は咄嗟に避けてしまい、風早くんが「…なんで…さけんの？」と言った後の爽子の思いが述べられる。

なにがあっても 風早くんは ずっとさけないで いて くれたのに
私が周りにいると 迷惑になる 離れた方がいい

(一方で)

さげたくない でも そばにいたい
さける事は正しいの？間違ってるの？ わかんないよ わかんない

(2巻 位置81～84)

その揺れ動く葛藤のなかで苦しむ爽子に風早くんは声をかける

風早「……やっぱ 納得いかないんだけど 嫌いじゃないなら なんで さけんの？」

爽子「……「私と」「喋らないで」ってやっぱり言えません」泣き出す爽子

爽子「やっぱり 思ってもいない事はいえないよ～

風早「えっ！！ 何!？」

爽子「株が落ちたらごめんなさ～～い なんでもいいからそばにいたいよ～～」

風早「待っ…黒沼! 」強い口調で「ちゃんと喋ってくんさきゃ わかんない」

爽子「……私が周りにいると株が落ちるって……」

風早「株!? 誰が言った!？」

爽子「う…噂で…」

風早「噂!？」

風早「株とか噂とか そこに俺の意志はどこにもないじゃん! それは黒沼の決める事ではない 俺が決めることだ!」

風早「俺は……俺のしたい様にするよ 黒沼と喋りたければ喋るし 喋りたくなかったらこんな風に喋っていない! …噂なんてどーだっていい。俺にとっては俺を見てる黒沼だけが黒沼だ!!」

そこで爽子は思う

…私が周りにいたら みんなが迷惑すると思った。

だけど それでも ……私は求めていたの 矢野さんや吉田さんや風早くんのような存在を――ずっと 憧れていたの
大事に思う気持ち 大事にされる気持ちを

→風早くんを抱えられる中で、距離をとり、退避しようという思いよりも、彼とそして矢野や吉田と距離を近づけ、仲良くなりたいという思いが勝る様になっている。そこで爽子は現実に向き合おうという思いが強くなり、噂に対峙していく

4) 噂との対峙

爽子がトイレにいたときに、大勢の子（A組の女子達）が入ってきて、貞子には吉田と矢野がバックについているという噂を直接聞き、噂を話している子たちと対峙する。

そこで明らかになったことは風早くんをめぐる壮絶な争いであった。

A組と爽子との対峙のシーン

矢野、吉田との和解のシーン

交友関係が形成され、クラスでの交友関係が形成される。その後胡桃沢 梅という男子生徒からの憧れの的の人と対峙していくことになる→エディプス葛藤

Ⅲ. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

矢野あやのと吉田千鶴との関係は一旦は近づくものの、色々な噂に翻弄され、彼女らとの関係が一時期ギクシャクしてしまう。しかし風早くんのサポートもあり、爽子は噂元の人達と対峙し、改めて矢野と吉田が爽子にとってかけがえのない存在であることを深く理解し、彼女らとの友情はより強固になっていく。

その一連の過程が爽子の人との距離感を巡る葛藤を投影している様に感じられる。今まで殻に閉じこもってきた爽子は矢野と吉田と親しくなり、一旦彼女らとの距離感が近くなる。すると急激に距離が近づいたために、爽子自身 PS ポジションになり、二人への迫害不

安や相手への加害意識も出てきてしまい、関係性の維持が怖くなり、自ら距離をとり、元の状態に戻ろうとする。(そこいらの心の動きが、所謂心的平衡なのかもしれない)そこを止めてくれたのが風早くんである。風早くんが爽子の人間関係を巡る情緒的葛藤を受け止めてくれたことで、矢野と吉田との友情関係が確固としたものとなったと考えても過言ではないと感じられる。(その点が竜とそばかすの「U」という潜在空間と違う印象を受ける。)

それから爽子はクラスでの交友関係がひろがり、日々の生活が彩りをもったものになっていく。そこで、憧れの風早くんと付き合うようになるまでには、もうひと段落、風早くんとの距離を縮め、彼と対等の関係になっていくことである。ある種それは爽子自身が憧れの中に入っていき、叶わないと感じてきた対象と対等になっていくことである。

それはまさに爽子自身のエディプス葛藤に向き合うことである。

1. エディプス葛藤とは

エディプス期（～6歳）父・母・自分の三者の葛藤：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

→父・母の関係性には叶わないと感じている一方で対等な関係を形成したいと考え、葛藤する心性。

この「君に届け」では爽子は、くるみちゃんに初めて遭遇したときにフランス人形の様だと評し、くるみちゃんから爽子が声をかけられたときに「…なんだか…風早くんみたい……！」と感じている。そして風早くんとくるみちゃんが談笑している姿は、学年の誰もがお似合いだと評し、爽子自身も episode 10 で「くるみちゃんがあんまり可愛くて、うらやましくなって 私も可愛くなりたいなあって」感じている。

ここで、風早くんを父、くるみちゃんを母と見立て、同じ様になって、その中に入りたいという願望を爽子は感じており、風早くん、くるみちゃんへのエディプス葛藤を抱き始めている。

そこでくるみちゃんに対して羨ましい思いを抱く一方で、風早くんに対しても彼の一挙手一投足がこれまで以上にきになり、風早くんの顔を見るだけでも胸が痛いと感じるようになり、憧れから恋愛の対象にシフトするようになっている。

そしてくるみちゃんも風早くんと爽子が話している中に、割って入っていかうとして、く

るみちゃんと爽子の距離も近づいていく。そこで、風早くん、くるみちゃん、爽子の三角関係を巡る葛藤が描かれていく。(episode 10.) それはまさにエディプスコンプレックスの始まりである。

2. くるみちゃんとの対峙 エディプス葛藤に向き合うということ

1) くるみちゃんの本心がみえた中での爽子とくるみちゃんの対話

episode 11 で爽子は風早くんを意識し始める中で、彼との関係性がギクシャクしてしまい、一方で風早くんとくるみちゃんの関わりが自然であると感じ、くるみちゃんのことを「カワイイ上にいい人な上にフレンドリー…」と理想化している。しかしその裏には、くるみちゃんに対する強い羨望があるのではないだろうか？

その後、爽子がくるみちゃんに、風早くんとうまく話せない悩み事を打ち明けると、爽子と風早くんはタイプが違うこと、爽子は陰気で、人それぞれ立ち位置があるといい、くるみちゃんは、さりげなく風早くんと爽子は不釣り合いで、自分の方がお似合いだという風にマウントをとっている。そこで爽子は、くるみちゃんと風早くんは仲が良いからと伝え、
「フツー」とくるみちゃんは謙遜する。そこで爽子は、くるみちゃんですら普通ならわたしなんか緊張して当然かもと感じ、以前の彼女は風早くんと挨拶もろくにできないで、それが普通だったと比べると変わっていること、徐々に距離を近づけていけば、いつかくるみちゃんのように自然になれると希望を抱き始める。このアニメでは、爽子が天然な思考だからくるみちゃんの策略に引っ掛からず、くるみちゃんが悔しい思いをするかの様な形で描かれている様に感じられる。

そこには爽子自身が元々、自身も風早くん達のように存在(ある意味、両親の様な存在)に近づきたいという強い欲求を持ち始めたからこそ、くるみちゃんの話聞いて、風早くんやくるみちゃんのような人たちに自分もなれるかもしれないと感じたと考えられる。

くるみちゃんが敵意をあらわにするなかで、くるみちゃんが風早くんに恋愛感情を抱いていることをふと考えた時に爽子自身が風早くんに恋愛感情を抱いていることを知る。

その後、風早くんと爽子の仲を引き剥がそうとする、くるみちゃんの(ある意味、悪意ある)策略が色々行われる。しかし策略はことごとく失敗し、その策が矢野・吉田にわかってしま

う。そのことが爽子に知らされ、くるみちゃん自らが、爽子を貶めるために、爽子が矢野・吉田の悪い噂を言っているということを周りに吹聴していたことを開き直って白状する。

そのシーン

くるみちゃん：誤解じゃないよ……。嘘でもなんでもよかったの 2人の悪い噂も爽子ちゃんがいついたことも 流したのはわたしだよ。

爽子：ど…どうして……

くるみちゃん：……邪魔なんだもん 爽子ちゃん ちづちゃんたちや……みんなと離れちゃえばいいなーと思って

爽子：……くるみちゃん……私のこと……嫌いだったの……？

くるみちゃん：そうだよ 今頃気付いたの？ 「友達」なんて 一度も思ったことない。

その言葉に吉田は憤り、くるみちゃんに怒りをぶつける。

くるみちゃん：やっぱり……ずるいよ 爽子ちゃん 人を利用して何が悪いのよ！みんなだってわたしを利用していらなくなったらポイってするでしょ！わたしだって利用して何が悪いの！！

こんどは矢野がその言葉に憤り、噂を流している大元が、くるみちゃんであることをバラすと言う。

くるみちゃん：言えばいいじゃん！ 言えばいいよ風早に！！

呆然とする爽子

くるみちゃん：……なによ いけば？ わたしのこと ばらさなきゃいけないでしょ？ それでまた風早に同情してもらえばいい。

その後爽子はバラすことを止めてもらうために矢野・吉田に懇願する。そのときの爽子の心情

爽子：……何でなんであんなこと言うのか わからないけれど あんなの……本音じゃな

い 絶対本音じゃない だって すきは人に悪く思われたいわけないよ…。

その後、くるみちゃんの元に戻る爽子

爽子：…やっぱり…まだここにいた……

くるみちゃん：…なによ…笑いにきたの？ それとも言い忘れた文句？ 早くいえば？

それともまさか同情？……

爽子：私 風早くんがすき ちゃんと恋愛感情で 風早くんがだいすき さっきは …本当はそれを言いに来たの くるみちゃんに 言いたかったの？

爽子：友達に言うのって……こんなにドキドキするんだね…くるみちゃん こんなだったんだ…ドキドキして……

くるみちゃん：友達じゃないって…だからあんたと一緒にしないでって…言ってるんじゃない…

爽子：(くるみちゃんの言葉に重ねる様に) 緊張しなかった…少し…はずかしくなかった？……すこし…うれしくなかった？ 言葉にした時とか 「すき」って自覚したとき

くるみちゃん：…うれしい… …なんで爽子ちゃんに言ったことでわたしが……？

邪魔だって 言ってんじゃない！！何の苦勞もなく 風早の周りにいるあんたなんて嫌いだって 爽子ちゃんが相手なら勝てるって思ったよ！！だってわたしの方が爽子ちゃんよりずっとずっと…ずっと…… (切なそうに) 風早のことすきだもん 絶対そうだもん

爽子：…私…最初のくるみちゃんよりも 今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと思う……

くるみちゃん：わたしが可愛いなんてわかって……でも…そんなの意味ないじゃん…風早がすきになってくれなきゃ意味ないじゃん！！

…しってるよ…風早がわたしのことをすきじゃいのくらいしってる……ずっと……ずっとみてきたんだから…… なんて戻ってきたの あんたの前で こんな こんな風に泣く…なんて

爽子：……くるみちゃんが 風早くんのいいところとか全部しってるから そーいうの くるみちゃんとだったら話し合えるから

くるみちゃん：…あんたなんて…大きらい…

爽子の思い：くるみちゃんを うらやましかったのは きっと 顔立ちとか雰囲気とかお

似合いだからとかだけじゃない

きっと 風早くんに対するくるみちゃんを 可愛いと思ったから

【考察】

このシーンは「竜とそばかすの姫」のルカちゃんとすずとの会話のシーンを思い出させる。ルカちゃんが完全無欠のヒロインではなく、彼女もすずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。それはすず自身が、抑うつポジションを受け入れつつあり、成熟したからこそ知ることができたと感じられる。と述べた

このエピソードでは風早くんを巡る葛藤からくるみちゃんは化けの皮が剥がれた形になり、「竜とそばかす」の爽やかさに比べて、くるみちゃんはあざとく、醜態を曝け出し、ある種私利私欲の様を見せている。けれども、それであるがゆえに、くるみちゃんが、手の届かないところにいるヒロインではなく、一人の俗世に塗れた平凡な人間であることを表している。そんなくるみちゃんの姿をみた爽子は彼女が自分と同様にコンプレックスを抱え、それゆえに狡猾な手段をつかってしまう、一人の弱い人間だということ知ったのだと思われる。

一般的な作品ではあざとく醜態を曝け出したライバルに主人公は失望し、排除されフェイドアウトされていく印象があるが、この作品では、爽子は風早くんに対するくるみちゃんの一途な思いに共感し、寄り添っている。そしてくるみちゃんが爽子に激しい陰性感情をぶつけても、それを受け止めている。

最後の爽子の言葉が印象的である「くるみちゃんを うらやましかったのは (略)

きっと 風早くんに対するくるみちゃんを 可愛いと思ったから」

そういう爽子の姿を描くことで、一人の成熟し魅力的な女性へと変化していることを鮮やかに描き出している。

2) くるみちゃんが爽子に突き動かされて、主体的に行動するまで

爽子がくるみちゃんに真摯に向き合い接することが、くるみちゃんの心を揺さぶる。これまで受身的で噂や流したり、そそのかしたりして人を動かすパッシブアグレッシブ(受動的攻撃行動)的な行動をとってきたが、ふと中学時代のエピソードを思い出す。

(episode17) くるみちゃんは中学時代、女の子たちからも慕われていただけでなく、顔立ちがよく可愛いために、男の子からちやほやされることが多かった。しかし女の子達からはそれを利用していただけにすぎないこと「くるみがすきな人できたら邪魔しちゃうおー

よ」と言っていたことを聞き、より自分の思いを話さなくなったこと思い出す。

(受動的攻撃的コミュニケーションの根底にあるのは、直接的な衝突に対する恐怖心・回避したい気持ち、無力感、不安である)

そして風早くんと出会った時にくるみちゃんは意を決して自分の思いを伝える。

くるみちゃん：…風早…爽子ちゃんってどんな子？

風早くん：黒沼は誤解されやすいけど…なんだかんだリスクしょいながら本当のことを言うから だから俺 黒沼が「こうだ」って言ったら「そうなんだ」って思う。

くるみちゃん：…リスク？

風早くん：黒沼は思っていないだろうけど 何言っても絶対安全な場所にいる奴だったら吉田や矢野も黒沼のこと信じきれなかったかもしれないもん
力になりたいなと思っても 結局自分で頑張っちゃうからなあ黒沼は……頑張ったなあって思う …て うわー何言ってんだ俺 すげーえらそう！！ んじゃ

(中略)

くるみちゃん：待って…風早！ わたし…ピンのことなんか好きじゃない

わたしが好きなのは…風早くんだよ ずっと見てきたのは風早だもん！！

風早だもん……他の人を…好きだなんて 風早が思わないで…

風早くん：ごめん！！ 胡桃沢！ごめん！！ 好きな子がいるんだ 他の子のこと その子以上に想えないんだ ごめんな

くるみちゃん：…知ってるよ バレバレだもん 風早

風早くん：え！？ (汗)

くるみちゃん：…わたしに告白されて…ちょっとでも嬉しい？

風早くん：うん ありがとな！

くるみちゃん：…1回だけ…わたしの名前呼んで…下の名前

風早くん：梅！

くるみちゃん：…あーあ！！ このばばくさい名前もそんな悪くないっか！！も～言うつもりなんかなかったのに！計算狂いまくり！…一番計算を狂わせたのは…風早だったけど…もう 二度と こんな可愛い子目の前に現れないんだからね！！

(中略)

風早くん：胡桃沢 そんな性格だったっけ？ (このあとくるみちゃんはスッキリした表情をみせる) (爽子：…私…最初のくるみちゃんよりも 今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと思う……というセリフを彷彿とさせる)

くるみちゃん：風早 女見る目ないもんね！ ばいばい

【考察】

くるみちゃんが風早くんに爽子の評価を尋ねたときに「リスクを背負いながら本当のことを言う」と言う様に風早は爽子が何事も真摯に向き合い、だからこそなんとかしたいと思ひ、惹きつけられると言っている様に感じられる。それはこれまでのくるみちゃんとは真逆である。そしてくるみちゃんは爽子に真摯に思いを受け止め、心揺さぶられたのちに風早くんが放った言葉は彼女を受身的な態度から主体的にアクションを起こす様に突き動かした様に感じられる。そしてくるみちゃんは意を決して告白する。

その思いは叶わなかったが、しかし主体的に行動できたことで、彼女はさっぱりとした表情をし、「女見る目ないもんね！」と言い切る。それはある意味負け惜しみではあるが、可愛い子ぶって男に媚びる過去の自分から脱却できた清々しさでもある様に感じられる。だからこそ自分の名前が「梅」と呼ばれることを「そんな悪くないっか！！」と言える様になったと考えられる。

前シーンで爽子は「私…最初のくるみちゃんよりも 今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと思う」と言ったが、まさに主体的に生きる姿の美しさがでていた様に感じられる。（「君の名は」で「あの日、星が降った日。それはまるで、夢の景色のように、ただひたすらに美しい眺めだった。」と瀧と三葉が語ったシーンを彷彿とさせる）

3) ライバルとしてのくるみちゃん

翌日、くるみちゃんは泣き腫らした顔を隠すためにサングラス姿で登校する。その姿で爽子と対峙するシーン

爽子：…くるみちゃん…

くるみちゃん：…わたしだって……すきになった時は…嬉しかったよ……人が…風早をほめても話にのらないで どんなにすきかも誰にも言わないで 自分だけで ……一人で…しまってきたけど

…わたし 爽子ちゃんが万が一億が一風早とうまくいっても絶対に「よかったね」とか言わないからね！！風早がすきになる女なんて大っきらいだもん！

爽子：ともだちには……なれないんだよね？

くるみちゃん：…ライバルでしょ！ あ～～っ もお 超くやしーっ！！なんで負けるのお！！超！超くやしい！！

【考察】

くるみが憧れの存在ではなく、爽子にとって対等な存在と感じ初めているだけではなく、くるみちゃん自身も爽子に対して猫被った感じではなく、色々な感情をむき出しにぶつけてきている。爽子の存在を自分と同じ対等な存在と認めたのだと考えられる。

このとき爽子はくるみちゃんというエディプス葛藤の対象に対峙し、一人の魅力的な女性になっている。それは「君の名は」で三葉が初めて父親と対峙したときの様に魅力的である。そして風早君を憧れの対象ではなく、対等な恋愛対象と捉え始めている。ここで爽子と風早くんとの関係性をめぐるストーリーは SEASON1 では終わっているが、早晚彼女ら二人は付き合うことになるだろう。そう確信させる終わり方であったと思われる。

このようにこのアニメは風早くんという今後恋愛対象になるであろう人物との出会いを通じて主人公である爽子の心の成長とともに二人の恋模様が描かれている。だからこそこの年代の人々は爽子に同一化し、この作品に非常に惹きつけられたのではないかと考えられる。